# 連舞（つれまい）

有吉佐和子

集英社

連舞
昭和三十八年六月二十五日初版発行
昭和四十八年二月十五日三版発行
著者　有吉佐和子
題簽装幀　町　春草
発行者　陶山　巌
発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ッ橋二ノ五ノ十
電話　東京二六五局六一一一
振替　東京一五六五三
印刷　中央精版印刷株式会社
定価　五六〇円
著者との了解により検印を廃止します。
0093-771016-3041
©1967 SAWAKO ARIYOSHI
Printed in Japan

連

舞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

妹の千春が生れたときのことを、秋子はまるで昨日の出来事のように克明に思い出すことができる。秋子はそのとき数え年の六つで、その幼さでは母親の出産前後を如実に記憶するのは無理な筈であったが、そう自分で考えることがあってもなお、秋子は頑なに、千春が生れたときのことを、寸分の違いもなく自分は思い出すことができるのだと思っている。

それは南向きの縁側も、まだ蹠に冷たく感じられる早春の出来事であった。朝まだき、秋子は自分の部屋の前の廊下を、慌だしく人が行き交う跫音を聴いて目を覚した。隣の寝床は蛻の殻で、いつもは秋子より朝のおそい糸代の姿もなかった。子供心にも、この家の中に異変が起っていることは感じとれた。秋子はそっと起上り、寝巻の前を掻き合わせながら廊下へ出た。

内弟子たちは、皆起き出ていて、秋子の母親の居間と、台所の間を急がしく往来していた。誰もが緊張した表情で、寝巻姿の秋子を認めても、それに注意を払ったり、声をかけたりする者はなかった。素足で廊下に佇めば、冷気が躰に浸みてくる。秋子は、この家の中で、急に自分が疎外され始めたのを、感じないわけにはいかなかった。

産婆が内弟子の一人に手を曳くようにされて、秋子の目の前を駈け抜けたが、その中年女の醜く肥満した後姿は、秋子の幸福を奪って過ぎた怪物のようであった。ずしずし、と響く彼女の跫音は、廊下を伝って秋子の躰にずし、ずしと、太い杭でも打込むように響いた。梶川寿々の一人娘という地位が、その杭の先で叩き潰されて行くのを、秋子は既にこのとき予期していたのである。

母親である寿々の部屋には、這入れなかった。入口に内弟子たちが息を詰めて控えていて、誰も秋子を省みなかったし、秋子と一番親しい糸代は部屋の中にいるらしくて、姿が見えなかった。奥から苦しそうな呻めきが洩れてきたが、秋子にはそれが母親の声とは思われず、異様な雰囲気の中から、異形なものが部屋の奥にいて、それが呻めいているのではないかと思ってしまった。後退りして、秋子は母親の部屋から離れたが、自分が後退りしているのではなく、母親という存在が自分から遠のいていくように思われた。それは、幼い子供の心には、支えきれないほどの大きな絶望感というものであった。

千春の産声を、秋子は稽古場の舞台の上で聴いた。自分の寝室に戻って寝る気にはなれなかったのと、内弟子たちの布団を敷いてない部屋というのは、この家の中では台所と稽古場以外にはなかったからである。梶川流で上根岸（かみねぎし）といえば、もうずっと前から寿々と通じるくらい、若い頃から名の通った踊り手である寿々は、踊りと男以外には贅沢のないひとであったことでも有名で、だから上根岸の家も決して大仰な構えでなく、内弟子の数の割合からすれば間数も勘いこじんまりとしたものであったが、その造作分を稽古場にかけて、舞台は三間間口の総檜造りという町の師匠にしては立派すぎるほど見事なものであった。

蹠が冷えきっていたけれども、秋子はそれよりも胸のあたりが寒くて、寝巻の袖で自分の胸許を抱くようにして舞台へ上った。癇性の寿々は床の間にも掛軸以外の飾り物は置かないほどで、だから舞台には衝立のような道具一つなく広々としていた。上手から舞台の奥にかけて、長押（なげし）に寿々が取立てた名取り札がずらりと並んで打付けてある。

梶川寿々の札が一際大きく、続いて名取り筆頭の梶川寿三代、梶川寿々枝、梶川寿喜、梶川寿美、梶川寿志栄、梶川寿美礼、梶川寿久、梶川寿々香、梶川寿栄、……寿々の寿の字をとった名取り名の

恰度中程に、糸代の梶川寿々糸という名取り札があった。秋子は、まだ小学校に上っていないし、難かしい漢字の文字群は、読むどころか見馴れてもいないのであったけれども、やはり梶川流の師匠の家に生れた者として三味線の音〆めが耳に親しいのと同じように、梶川の名取り名には目も馴染んでいた。糸代の梶川寿々糸は、すずしと読むことを先に知っていて、いつであったか、もうずっと前に、舞台を空拭きしていた糸代が、

「お嬢ちゃま、私の名取り札は、これですよ」

背伸びをして指さしたのを覚えている。

その、梶川寿々糸の名取り札に目を止めたときであった。奥から千春の産声が聞こえたのは。

咄嗟に、秋子は子供が産れ出たということよりも、先頃から感じていた異変が、ようやく形になったと思った。千春の泣き声は、秋子がこれまでに聞いたどの赤ン坊の泣き声より大きく、けたたましかった。この世に生を亨けたことを、こうも無遠慮に示していいものであろうかと思われるほど、大きく、けたたましい泣き声であった。秋子は最前の産婆の跫音で砕けたものが、この泣き声で四散するのを感じていた。秋子の心の中にある誇りも幸せも、蹴散らかして省みないような傍若無人な喚き声であった。

舞台の中央で胸を抱いたまま、秋子は硬直していた。長い、長い時間がそうして過ぎた。新生児の産声としても、千春の泣き声は、産婆が後々まで一つ話にしたほど、息の長い勇ましいものであったのだが秋子はそれを肩や足を凍らせて聴いていたのであった。

子供が産れてから七日目の、いわゆるお七夜の日まで、千春の父親は、この家に現れなかった。秋子は、千春の産声はまだ耳許に残っているほどよく覚えているのに、彼女が生れた翌日からお七夜までの記憶はまるでなくて、そのかわり、梶川猿寿郎が現れた日のことは、また克明に覚えている。

それはひどく薄寒い日の午後で、玄関の戸が開くと、
「お家元です」
誰かが早口に言い、すると家の中で一斉に、
「お家元ですよ」
「お家元が見えました」
「お家元が」
「お家元です」
連鎖反応のように家の中の者たちが口々に奥へ伝えた。
秋子はそのとき恰度手洗いから出て、庭先の手水鉢（ちょうずばち）の水をつかっていたのだったが、家の中の囁やきは聞こえていて、家元というのは誰なのか、この家で今、家元というのはどういう立場にあるものなのか、言葉にはならないが全身でぴりりと感じとっていた。
梶川猿寿郎は、毛織りのインバネスを着たままで秋子の目の前の廊下を渡って歩いて行ったが、前後に女どもを従えていて、この家を彼が訪れたのは始めてではないのに、どこか物々しい気配が彼の躰を包んでいた。秋子は、この日の白髪頭の首をすくめた老人の後姿を、今になっても忘れることができない。それというのも、秋子がこの七世梶川猿寿郎を見たのは、これが最後だったからである。そして、母親を愛した男というより、妹の父親である男として、この日見た猿寿郎は、その後秋子が実に頻繁に彼を思い出すときの姿となった。
七世猿寿郎は、家元名を襲う前の名を三千夫といい、それは彼の戸籍名でもあった。
若い頃は放蕩の限りを尽していて、女出入りの揚句に親から勘当され、上方で修業していた時期もある。先代の家元が急病で斃れたとき呼び戻され、そして七世を襲った人なのだが、女極道は一向に

改まらなかった。女好きのする顔立ちである上に、踊りの才能が並外れていて、今の梶川流を全盛に導いたのは彼の功績であると云われるほど、その見事な舞いぶりは人々を魅了せずには措かなかった。踊りの世界には女が多い。それも若く美しい女たちが犇めいていて、女の方で血道をあげれば猿寿郎でなくても男が木石でいられる筈はなかった。女たちもそれを心得ていて、猿寿郎の愛を享けることに、命を賭けるほどひたむきにはならないことになっていた。梶川流の門下でも、猿寿郎と割りない仲になった女たちの数は十指にも余ったのである。

秋子たちの母親である梶川寿々も、自分がその中の一人であり、それ以上の者でないことは充分に知っていた。だから、千春の名をつけるべき日になって、ようやく猿寿郎が顔を見せたことにも、それまで放って置かれたのを恨むどころか、却って思いがけない来訪であったことを喜ぶような有様であった。

まだ床の中にいた寿々は、急いで半身を起して胸許を身づくろったが、三十三歳になる彼女が、白っぽい寝巻の肩に黒髪を散らした姿は紅っ気がないのが却って仇っぽく美しかった。猿寿郎も、最初にそれを認めたらしい。

「美い女になったな」

挨拶がわりの言葉であった。嗄れた声で言い終ると、ごほっと大きな咳をし、拳で頤を叩いた。

が、彼が来た目的は寿々を見舞うことよりも、千春にあったらしい。咳を治めると、猿寿郎は急いで寿々の隣の小さな蒲団に寝かされている自分の娘を覗きこんだ。

「うむ、うむ」

彼は満足を言葉で現せずに、ただ唸っていた。この七日の間、彼は直ぐにも飛出したい想いを本妻に力ずくで押えられていたのである。年齢よりは矍鑠としていても、還暦を迎えた彼にとって、女に

子が出来るというのは思いがけない由々しさを持っていた。それは、単なる父性愛の喜びでなく、自分の生命の確認というものであったに違いない。

「うむ、うむ」

猿寿郎は、内弟子たちに助けられて、子供を抱きあげると、目を細めて娘の顔を眺めた。

「うむ、可愛いい。器量よしじゃ」

頬ずりもしかねないほどの愛しみ方であった。

生後七日目の赤ン坊は、肌の色もまだ美しくなかったし、目鼻立ちも判然としていなくて、小さいこと以外には可愛いさなどを感じさせるものは何も持っていなかったのであるけれども、猿寿郎は嬰児を老いた膝に抱いて、いつまでも離さなかった。その有様は、多くの女を愛しながら、遂に一人の女に執着しなかった猿寿郎を知る者にとっては、意外なほどであった。

「お家元、今日は、お七夜なんですよ」

寿々が言った。

「うむ。名前は考えてきた。筆を持って来い」

腰を浮した内弟子の一人に、寿々は、

「扇子を。新しいのだよ」

と、言った。

蒔絵の硯箱と、梶川流の梶ノ葉に流水の紋章が紅で銘のように小さく刷り込まれた白扇が、猿寿郎の前に整えられた。七世家元は、筆先にとっぷりと濃い墨を含ませると、扇の中央に大きく「千春」と書き、昭和六年三月七日、七世猿寿郎と達筆で署名してから、誇らかに寿々にそれを示した。

「まあ」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

感動して言葉のない女に、
「ちはる、と読む。どうだ、いい名前だろう。儂の本名が一字入っているぞ」
と、猿寿郎は、自分でも惚れ惚れするように、いつまでも眺めていた。
流派に連る者にとって、家元は絶対的な存在である。彼は神格化され、そうすることによって門弟たちは各自の地盤を安定させることができた。梶川流を学ぶ者にとって、梶川猿寿郎は至上の存在である。まして女たちの間で、猿寿郎は老いても尚、渇仰されていた。その人の愛を享けて子を産んだ今、寿々の心中はどんなものであっただろうか。猿寿郎の手から白扇を受取ると、寿々は押し頂いて、はらはらと涙を流した。この涙は、おそらく家元を頭に頂く流派に連った経験のない者には、芝居めいた感傷としか理解できないかもしれない。が、そういう人々でも、後年、寿々が千春に賭けた一時期を見れば、このときの彼女の涙を読むことができるだろう。
千春という名前には、猿寿郎が言ったように、彼の三千夫という本名から一字とっただけの意味以上に、もっと深いものがあったようである。三月の生れだから、春も由縁(ゆかり)がないわけではない。しかし、千の春という文字には、猿寿郎の生命の願望が秘められてはいなかっただろうか。
千春は、実の父親によって名付けられても、猿寿郎の戸籍には入れられなかった。戸籍の上での彼女は、寿々の本名である松本すずの私生児であり、梶川三千夫が認知したということになった。姉の秋子は、寿々の妹夫婦の子としての戸籍を持っていたのに、千春には寿々は認知だけでも猿寿郎の名を冠せていたかったのであろう。
猿寿郎は、折にふれては上根岸に足を向けるようになったが、女である寿々はもはや省みず、ただ千春だけをあやして、それで満足して帰って行った。その姿には、晩年の子を恋う哀れさがあったけれども、誰もそれを口に出して言うものはなく、彼が現れればその都度、

「お家元です」
「お家元ですよ」
「お家元が」
「お家元です」
大騒ぎで出迎え、もてなすのであった。
秋子は子供心にもこうした騒ぎの度に、自分と千春との違いというものを考えないわけにはいかなくて、
「私のお父さんは誰？」
糸代に訊くことがあったが、すると糸代は当惑して、口ごもりながら、
「ずっと前に亡くなったんですよ」
と言った。
「どんなひとなの？」
「私は知りませんよ、お嬢ちゃま」
町師匠の家の内弟子というのは、二種類あって、下女同然に働きながら踊りの稽古をつけてもらう者と、親元から充分な月謝と生活費の仕送りを受けながら同じ家に寝泊りしているだけの者とがあったが、糸代は前者で、十二の年から梶川寿々の許に来ていた。秋子が生れたときからの、入門であり、その頃は内弟子の数も今ほど多くはなかったから、糸代が秋子の世話をするのはごく自然の成行きであった。子供好きで、働き好きで、万事が地味な糸代は、師匠の娘の世話をすることを誇りとして、豆々しくよく仕えた。十七歳で寿々に取立てられて梶川の名をもらい、この稽古所では時々代稽古もするほどの技倆であったが、何分にも若すぎるし、小柄が災して舞台映えのしない損な舞手であ

ったから、決して目立たなかった。それでも、一人娘の秋子を、すっかり寿々から任されているので、他の弟子たちからも一目置かれてはいた。

土地柄で、下谷の芸者たちが多勢稽古に来ていたが、出産後の寿々はしばらく立って教えることができないので、そうすると振りの記憶力が人一倍いい糸代が、代りに稽古をすることになった。三味線は、やはり内弟子の寿々美が弾いた。

ひょっくり、ひょっくり、ひょっくりひょっと、罷り出でたるやつがれは、
色にも酒にも目なし鳥。
どっこいさうは虎の皮、褌のはしは取られても、
恋の手取りの僧法師、なかなかその手じゃまゐるまい……

「座頭」のように早手間で、軽い踊りなら大過はなかったが、同じ清元でも「七小町」のように情緒的なものであったり、「葱売り」のように芝居がかったものになると、寿々は下手な弟子たちをじれったがって、

「違うよ、違うったら。なんだい、その恰好は。それで小町のつもりかい？　呆れるよ、今日限りで踊りはやめちまいッ」

かあっと一息に怒鳴るのである。

それが教えられている者に投げつけられるときはまだよかったが、代稽古に立っている者が標的になってしまうと、目も当てられなかった。

「糸代ッ。そんなことを、いつ、誰が教えたよッ。なんだい、お前この家に、いったい幾つの時っか

ら来てるんだい？　何を見て暮してたんだ。あたしが、そんなぶざまな形で踊ったことが、一度だってあったかよッ。着物畳んで田舎へ帰っちまいッ」

激しいときには、革製の張り扇が、ぴしりと胸許へ飛んでくる。

「見ちゃいられないよ、ああッ。今日は稽古を止めた。みんな帰れ、帰れッ。お寿々さんは弟子が粗末で、店を張っていられないのさ」

生れは日本橋の紅屋の娘なのだが、幼いときに零落して芸者に売られたという生い立ちの寿々は、根が我儘で勝手者だったから、一度口を切って怒り出すと鎮まるのに大層時間がかかった。

「おすずのように怒鳴りっ放しに怒鳴っていたら、さぞ胸も腹もすかすかして、いい気持だろうな。江戸前の踊りになると、誰も真似手がないのは、そのせいだろう」

家元の猿寿郎が、感心したりするものだから、寿々の毒舌はいよいよ天下御免になってしまい、そうなるとこれがまた評判になって怒鳴られる方も、気を滅入らせることがなく、却って稽古に励むという妙な循環になった。

事実、手のつけられないほどの下手な踊りに対しては、寿々は口を結んで、詰らなそうな顔をして見ているだけで、何も言わなかった。怒鳴られるのは、脈のある弟子に限られていると、いつか人々は思うようにもなっていた。

秋子は、人形遊びやままごとにも倦きると、よく稽古場へ出かけて行って片隅に坐っていたものである。怒鳴ったり、扇子や四ツ竹を投げつけたりする母親を、怖いと思わないことはなかったが、同時にめざましいものとも思い、幽かな憧憬も込めて、それを見守っていた。寿々には、千春の生れる前から、子供にかまったり溺れたりするような月並な母性愛がなく、だから秋子は寿々の膝に抱かれたり、袂を摑んで物をねだったり、普通の子供なみの甘え方を母親にしたことがなかった。第一、稽

古の激しい寿々は、教えながら我を忘れて夢中になってしまうので、稽古の後は、口をきくのも億劫だというように、ぐったりしていた。子供を愛しむどころではなかった。

秋子は、自分が大きくなって踊りの稽古をしてもらうようになればどこか疎遠な母親とも、厳しく叱りとばされる愛弟子のように、ある緊張した愛情を親に抱くことができるのだと、子供心に漠然と期待していた。

踊りの稽古始は、どの芸事でもそうであるように、数え年六歳の六月六日ときめられていて、秋子は千春の生れた年に、その日を迎えた。

早朝から始まる稽古の、いの一番が稽古始の娘たちのために当てられていた。下谷の待合の娘や、同じ根岸に住む町内の三弦の師匠の娘が、同じく六歳で入門してきたが、寿々の娘である秋子は、第一番に稽古をつけられることになっていた。

糸代も緊張していて、この日のために前から用意していた秋子の稽古着を、衿を持って、さっと捌いてから、

「はい、胸を張って、お嬢ちゃま。着物を着るにも、踊るにも、姿勢のいいのが一番大切なことなんですよ」

と言った。

梶ノ葉を大きく飛ばし、流水を観世風に流した梶川流の揃いの浴衣は秋子の始めて着る本仕立で、肩揚げも、身揚げも、飛切り大きかった。糊の匂が、洗い糊と違って独特に強く、鼻を衝つ。秋子は、緊張していた。生れて始めての峻厳な緊張感であった。

稽古場に行くと、寿々は、もう舞台の下の畳に、きちんと坐っていた。座蒲団は敷いていなかった。六月六日なので、他の弟子たちも、秋子の稽古始を祝う心でか、いつもより早く顔を揃え、稽古

着になって、寿々の背後にずらりと控えていた。
糸代と秋子は、寿々の傍に坐ると、畳に手をついて、叮嚀に頭を下げた。
「お願いいたします」
糸代が言った。
「お立ち」
「はい」
糸代は秋子を舞台の中央に立たせ、自分は身を退いて、その三歩後に控えた。後見の姿であった。
寿々香が、寿々の傍から立って、秋子の前に膝をつくと、
「梶川のお扇子ですよ」
と言って、竹骨の白い扇子を秋子に手渡した。糸代から前以て稽古をさせられていたので、秋子はそれを膝前に一文字に置くと、舞台に手をついて、また叮嚀に頭を下げた。
「お願いします」
今度は秋子自身が言ったのだが、喉がひっつれて、うまく声が出なかった。顔を上げると、寿々が、これまでに見たこともないほど崇高な厳しい顔をして端座している。
「その扇子は、梶川流の扇子です。あなたは今日から梶川寿々に入門したんですよ。私を母さんと思っちゃいけません。分りましたか」
「はい」
「踊りの道は厳しくて、歩くと息の切れることが多いんだけど、秋子は自分でやるつもりがありますか。やりたくなければ、今そこで言いなさい。稽古に容赦はしないから、辛くても始めたらやめられない。辛いことが嫌なら、今そこで嫌だと言いなさい」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.